

うちの球磨さんは何かおかしい

御供のキツネ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある鎮守府の球磨さんは何かおかしい。球磨ちゃんではなく、球磨さんである。

目次

うちの球磨さんは何かおかしい

うちの球磨さんは何かおかしい

執務室で大量の事務仕事を片付けながら秘書艦である球磨さんを見る。

球磨は手際良く事務仕事をしており、意外と優秀どころか非常に優秀な球磨ちゃんとなっている。

ただ他の鎮守府で見るとような多摩や木曾と同じような格好ではなく、白いワイシャツの上に黒のベストを着ており、太股が眩しいショートパンツではなくすらつとした長い黒のズボンと言う球磨らしくない格好をしている。

ただし我が鎮守府に限って言えば球磨さんと言えばこの格好である。

「どうしたクマ。じろじろ見てないでさっさと仕事しろクマ。サボりなんて許さねえクマ」

実にとつてつけたような語尾だ。だってうちの球磨さんは語尾つけない。

「罰ゲームでふっかけておいて、とつてつけたようなとかわざわざ思うなんて良い度胸してんじゃねえか。クマ」

「心を読まれたことよりもその適当な語尾のほうが気になるな！」

「うるせえよ。良いからさっさと仕事しろ、クソ提督」

「それぼのちゃん！というか語尾忘れてる！」

「チツ……仕事しないと、腹パンぶち込むクマー」

「やだ、どめすちつく……」

冗談を言いながら止まっていた手を動かす。だって球磨さんが握り拳作ってるんだもん。尚、うちの球磨さんは戦艦棲姫を腹パン一撃で沈めて、戦艦勢の自信を喪失させたお茶目さんである。フフフ……怖い。

うちに来た当初はこんな感じじゃなかったのになあ、と思い出に浸ろうとしたところでふと思う。いや、球磨さんは最初っからこんな感じだったわ。初陣で駆逐艦どころか戦艦を殴り倒し、練度10未満で演習相手の練度99の大和を殴り倒し、その相手との夜戦でカットイ

ン集中砲火を喰らってカスダメで小破にさえ行かず、お返しとばかりにカットイン（腹パン、腹パン、腹パン）で相手の旗艦の武威を大破させてたわ。酸素魚雷はどうした。

その時のことを思い出すが、あの頃はまだ大人しかかったんだなあ。と思ってしまう。だって今の球磨さんは何故か艦載機を飛ばし、戦艦用の主砲を使い、副砲機銃酸素魚雷電探などほぼ全ての艀装を手足のように扱うようになってしまっている。それなのにトドメはいつも腹パンなのはどうしてなの球磨さん。

あと、どう考えても王の財宝みたいな使い方してるのってどういう原理なの。何も無い空間が黄金色に波打ったと思ったら無数の艦載機だの主砲だのが出てくるってもう艦娘じゃない何かになってない？

「つーかなんでこんな量になってんだよ。昨日と一昨日と、その前のもあるじゃねえか」

「昨日はぼのちゃんを撫でてクソ提督って言われて、一昨日は霞ママにバブみを感じてたらクスって言われて、その前は満潮のことフレんチクルーラーって言ってからフレんチクルーラー一緒に食べてました!」

「死ねよカス」

「顔はやめもぶるばあ!」

前が見えねえ!

「……なんで顔面陥没して生きてんだろうな、お前」

「ふっふっふ……提督って、そんなものさ……」

そう、提督たるもの艦娘の攻撃で死ぬことも、重傷を負うこともないのだ!あ、でも特定の艦娘が好き過ぎて重症になる提督は良く出ます。

「はあ……んじゃ、俺は自分の仕事終わったし抜けさせてもらうわ。サボったら前にお前が天龍のパンツ食ってたの龍田にばらすからな」  
「何故それを!!」

「ついでに龍田のも食ってたのばらすから」  
「いやん、それ本気で死んじゃうやつ」

「それが嫌ならさっさと仕事しろよ」

そう言ってから司令室から出て行く球磨さんは本当に割り当てた仕事を終わらせていた。でもね、球磨さん。秘書艦って普通は最後まで付き合ってくれるんですよ。ね、だから最後までお手伝いを……あ、アホ毛振り回さないで、それ本当に命を刈り取っちゃうアホ毛だから。もうそれプラーガか何かかかって言うくらいヒュンヒュンさせてるけど本当に危ないから。でも提督なら超余裕だけどな！

あ、ごめんなさい嘘です夢になっちゃうからそれやめて。首の近くをヒュンツてやめて。頭頂部の髪を狙うのもやめて！

「ちゃんと終われば差し入れくらいしてやるから。大井が」

「それ絶対に毒とか入ってるパターンじゃないですかやだー！」

大井っちは俺を北上様に這い寄る害虫か何かかと思ってるようでも何かと殺そうとしてくるのである。でも大抵は俺を哀れん北上様に止められているので俺は今ちゃんと生きている。今度北上様に何かお供えをしなければ……！

あ、でもそのお供えの為に近づいたらまた大井っちに狙われるんだった。

「ま、精々頑張れよ」

そうして本当に出て行つた球磨さん。

本当なら簡単に終わらないような書類の量だったのに平然とこなす辺り流石我が艦隊最古参の一人で、最強の艦娘である。一人連合艦隊と呼ばれているのは伊達ではない。尚、深海棲艦側の一人連合艦隊ことレ級と殴り合つて普通に勝てるのでうちの一人連合艦隊の方が上である。やっただぜ。

まあ、そんな球磨さんも元々気分屋であり、この鎮守府も沢山の艦娘によつて賑わい、そして戦力としても充分となっているので前線に出ることはほとんどない。

そのせいで、球磨さんの実力を知っている艦娘は全体の約三割に満たない状況なので新人の子に球磨さんのことを言つても信じてもらえない。球磨さんもそれで良い、信じられないのが普通だ。つて言つてるけど、その三割が全員球磨さんのことを球磨さんと呼んでるの

を不思議がられてるんですよ。

特に長門さんとか加賀さんとかうちの主力にさん付けされてるって相当なことだっけって気づいてます？あ、球磨さんにとっては二人ともちよつと大きい後輩くらいのご感覚でしたねそうでしたね。

「いやあ……一度全員に球磨さんのことを理解してもらうために、演習か出撃でも組むかあ。」

でも球磨さん気分屋だからなあ……」

そんな悩みを抱えながら、独り言を零して残された書類へと手を伸ばして仕事を片付けるのであった。

全ては大井つちが持つてくる差し入れ（毒入り）のために！提督たるもの、その毒だっけ愛情としてちゃんと受け止めないとね！